静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果に関するアンケート調査結果
－平成26年度－

平成27年12月4日

白木 賢信（常葉大学）

Ⅰ　調査結果の概要

1.　利用団体の小学校相当世代への傾斜は一層進んでおり、利用宿泊数は「1泊」と「2泊」の占有率が高まっている。

利用団体のプロフィールについては、「小学校」と「7～12歳」がそれぞれ最も比率が高い。利用宿泊数は、「1泊」と「2泊」が全体の殆どを占めながら推移しており、両者の占有率は、平成21年度以降は8割を超え、平成25年度以降は9割台で推移している。

2.　「自主性や協調性、社会性を身につける」が最も比率の高い利用目標であるのは変わりないが、次いで高いのは「自然に対して興味・関心を持つようになる」に固定化しつつある。利用目標の達成度は「期待以上にできるようになった」および「だいたい期待通りできるようになった」が殆どである。

利用目標の種類について、「自主性や協調性、社会性を身につける」は8ヶ年を通じて最も比率の高い項目で60%前後で推移している。次いで比率の高い項目は年々変化が見られるが、平成24年度以降は「自然に対して興味・関心を持つようになる」が20%近くの比率で推移している。利用目標の達成度は、「期待以上にできるようになった」と「だいたい期待通りできるようになった」を合わせた比率が8ヶ年を通じて90%を超えている。

3.　利用後の参加者の変容について、上位3項目の「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」「時間を守るようになった」「周りの人に優しく接するようになった」に次いで「仕事などを積極的にするようになった」が接近している。

利用後の参加者の変容について、「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」が平成24年度以降最も比率の高い項目で、次いで順に高い「時間を守るようになった」と「周りの人に優しく接するようになった」がそれぞれ30%台で推移しているが、平成26年度では「仕事などを積極的にするようになった」が両者に接近している。一方、「スポーツなど積極的に体を動かすようになった」と「その他」はともに下降傾向にある。

4.　繰り返し利用することによって予想される変容について、上位3項目の「時間を守るようになる」「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」「周りの人に優しく接するようになる」に次いで「仕事などを積極的にするようになる」と「自然を大切にするようになる」が上昇傾向にある。

繰り返し利用することによって予想される変容について、7ヶ年通じて「時間を守るようになる」「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」「周りの人に優しく接するようになる」が上位3項目で変わりない。但し、3項目に次いで比率の高い「仕事などを積極的にするようになる」と「自然を大切にするようになる」が平成24年度以降上昇傾向にある。一方、「スポーツなど積極的に体を動かすようになる」は平成21年度以降低下傾向にある。

Ⅱ　調査の概要

1.　目的

本調査の目的は、静岡県立朝霧野外活動センター（以下、センターと呼ぶ）利用団体のセンター利用による教育的効果を明らかにすることである。それにより、施設の評価は利用者数の増減に頼るところが大きい中、それ以外の評価指標としての基礎資料を提示するが、昨年度に引き続き、ここでは平成19～26年度の8年間における経年変化の傾向もあわせて提示することにしたい。

2.　内容

上述の目的を達成するために、センター利用による教育的効果に関する調査を行うが、その内容は以下の通りである。

（1）　利用団体の種類
（2）　利用団体の主たる年齢層
（3）　利用宿泊数
（4）　利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）
（5）　利用目標の達成度
（6）　利用後の参加者の変容
（7）　繰り返し利用することによって予想される変容

3.　対象

平成26年度のセンター利用団体

4.　方法

質問紙による配付回収法で、具体的な手順は次の通り。

（1）　センター担当職員が、各利用団体担当者に、利用期間中にアンケート形式の質問紙を配付する。
（2）　各利用団体担当者は、センター利用後約1ヶ月の間に質問紙に回答し、回答済の質問紙をファックスでセンター宛に返送する。

5.　調査票（質問紙）の回収状況

回収数（率）　172（29%）　　有効回収率　172（29%）

なお、ここで算出した回収率・有効回収率は、平成26年度における統計上のセンター利用団体数（592団体）を母数としている。

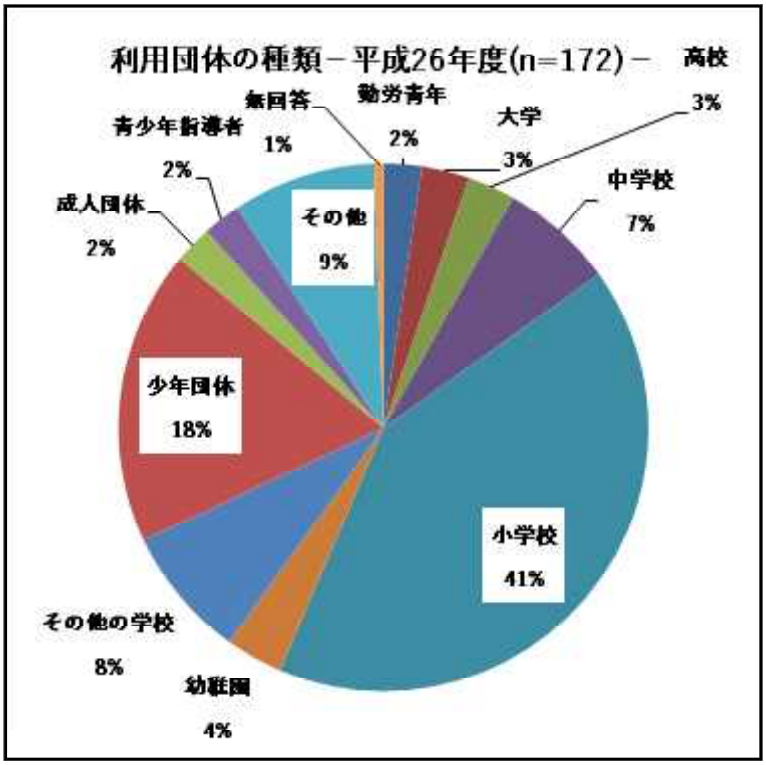
6.　実施期間

平成26年4月～平成27年3月

Ⅲ　調査の結果

1.　利用団体のプロフィール

ここでは、本調査の対象となった利用団体のプロフィールについて述べることにしよう。まず、利用団体の種類についてであるが（図1）、最も比率が高いのは「小学校」の41％で、次いで高いのは「少年団体」の18%、さらに「その他」の9%が続いている。なお、学校関係は66％で全体のほぼ2/3を占めている。



「その他」の内訳

親子劇場、企業学童クラブ、行政、サポート校、市役所の募集で参加された寄り合いどころ、宗教団体、ジュニアリーダー、スポーツ競技団体、スポーツクラブ、スポーツ団体、ボーイスカウト、まちづくりセンター合同事業、幼児･児童、JICAシニアボランティアOB会、NPO法人

図1　利用団体の種類

この利用団体の種類の平成19～26年度間の変化について示したものが図2である。これによると、最も比率の高い「小学校」は、30%台後半で推移していたところ、平成26年度で40%を越えている。次いで高い「少年団体」は唯一の10%台の種類であるが、「小学校」との差で見ると、平成25年度では15ポイント差であったが、平成26年度では23ポイント差に開いている。その次に高い「その他」は、平成23年度から下降傾向にあり、平成26年度までに9ポイント低下している。また「中学校」も同様の傾向で、平成21年度から平成26年度までに10ポイント低くなっている。

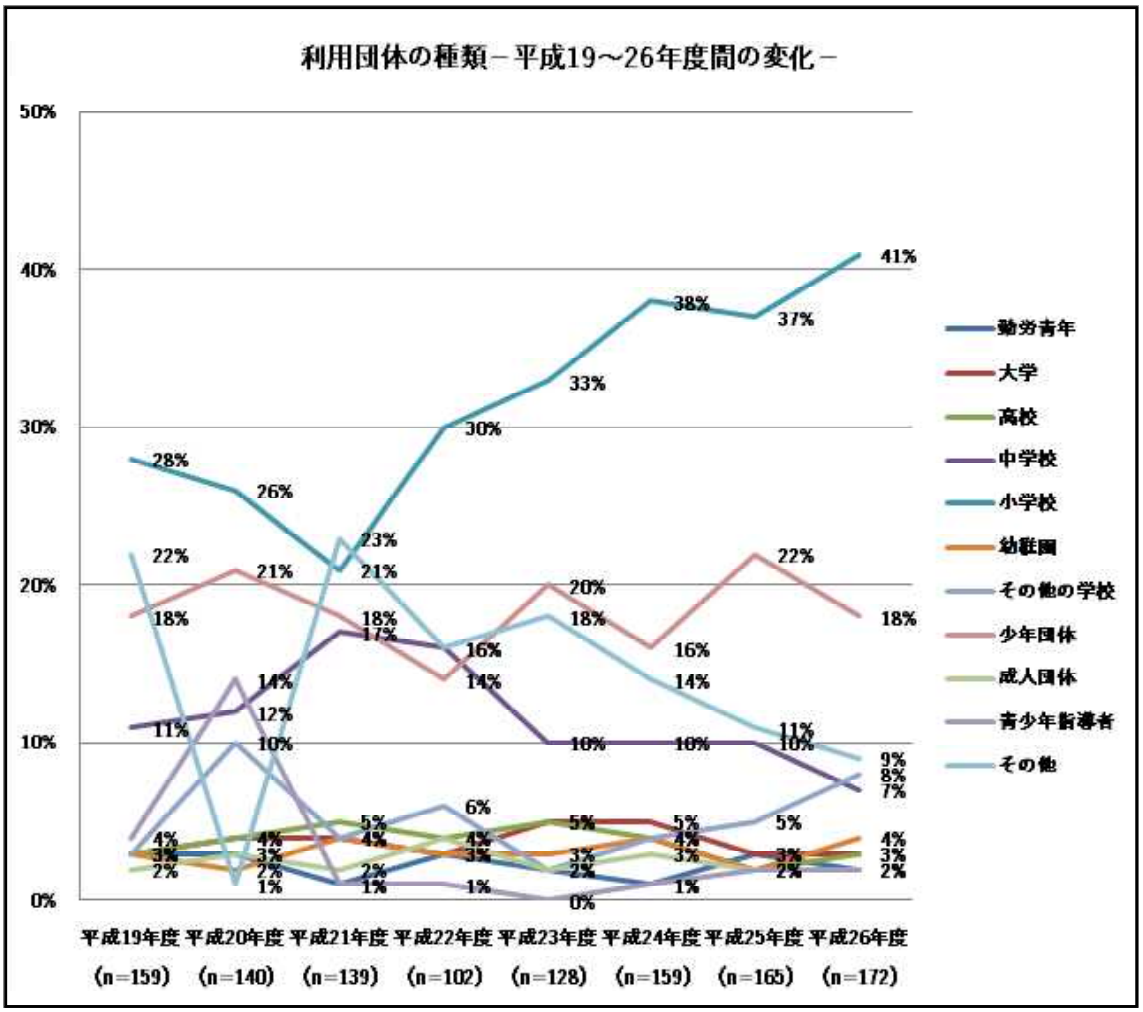


図2　利用団体の種類－平成19～26年度間の変化－

次に、利用団体の主たる年齢層については（図3)、「7～12歳」が65％で最も高く全体の2/3近くである。次いで高いのは「13～18歳」の16％である。

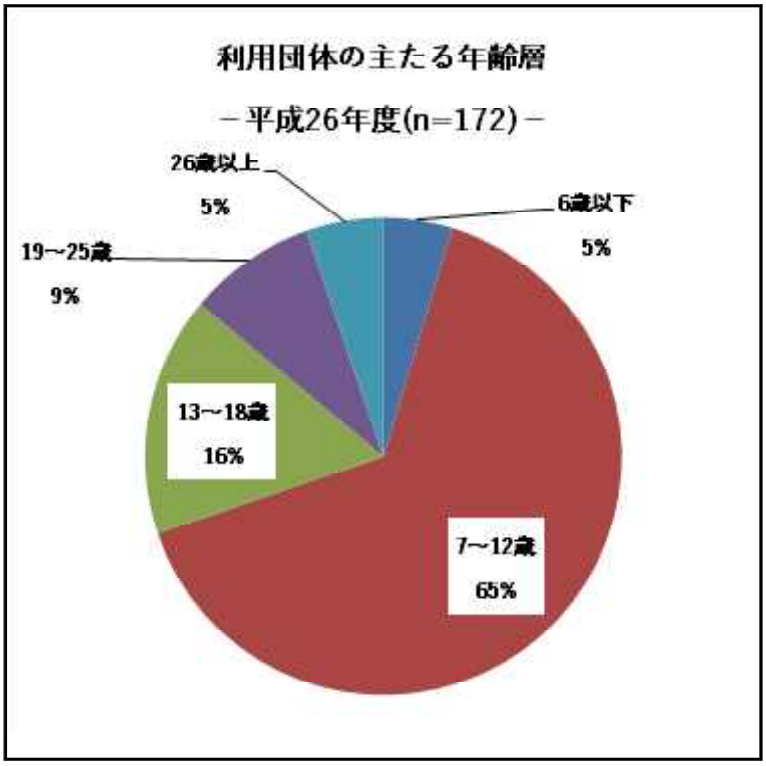


図3　利用団体の主たる年齢層

この利用団体の主たる年齢層を平成19～26年度の変化でみると（図4）、8ヶ年とも最も比率の高い「7～12歳」は平成23年度以降は60%台で推移している。次いで高い「13～18歳」の比率は平成21年度以降は低下傾向にあり、平成26年度の比率は8ヶ年で最も低い。なお、その他の年齢層はほぼ横ばいで、いずれも1ケタ台の比率で推移している。

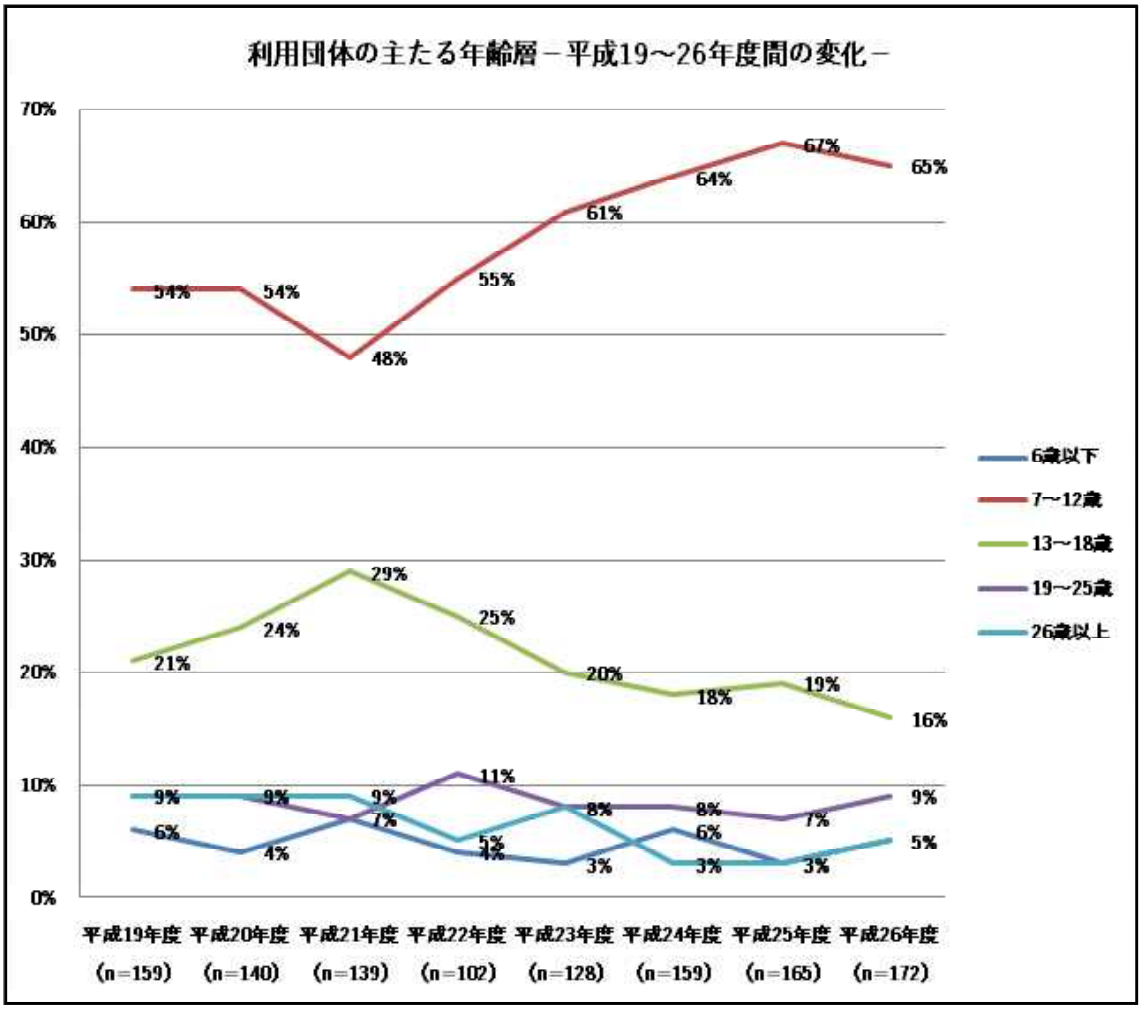


図4　利用団体の主たる年齢層－平成19～26年度間の変化－

さらに利用宿泊数については（図5)、「1泊」の比率が最も高く（48%)、全体の半数近くを占めている。次いで高い「2泊」（42%）も40%を越えており、両者で全体の9割を占めている。

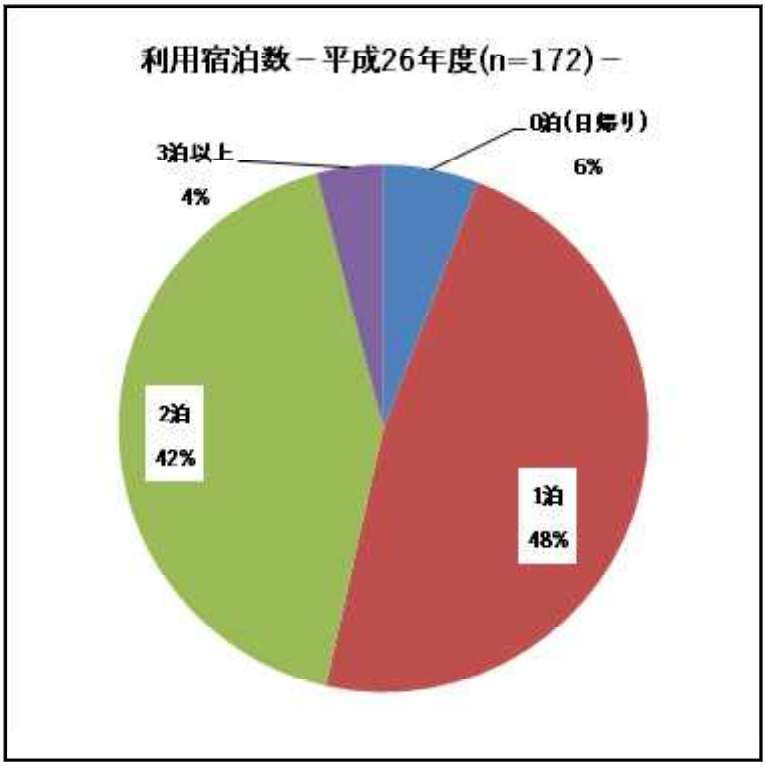


図5　利用宿泊数

この利用宿泊数を平成19～26年度間の変化でみると（図6）、「1泊」と「2泊」の全体における占有率は、平成21年度以降は8割を超え、平成25年度以降は9割台で推移している。一方、「0泊（日帰り）」と「3泊以上」の占有率については、平成20年度までは2割を超えていたが、平成25年度以降は1割以内で推移している。

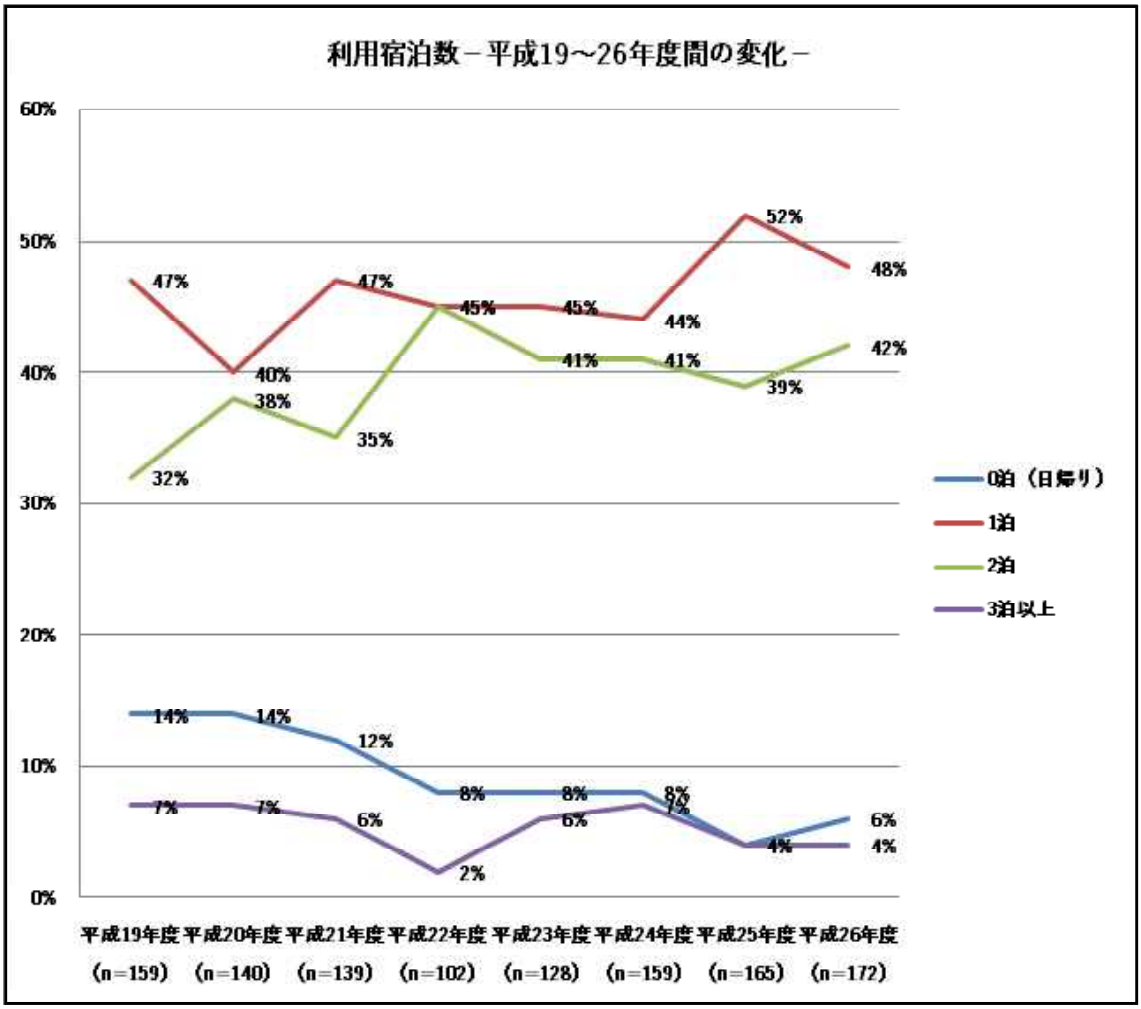


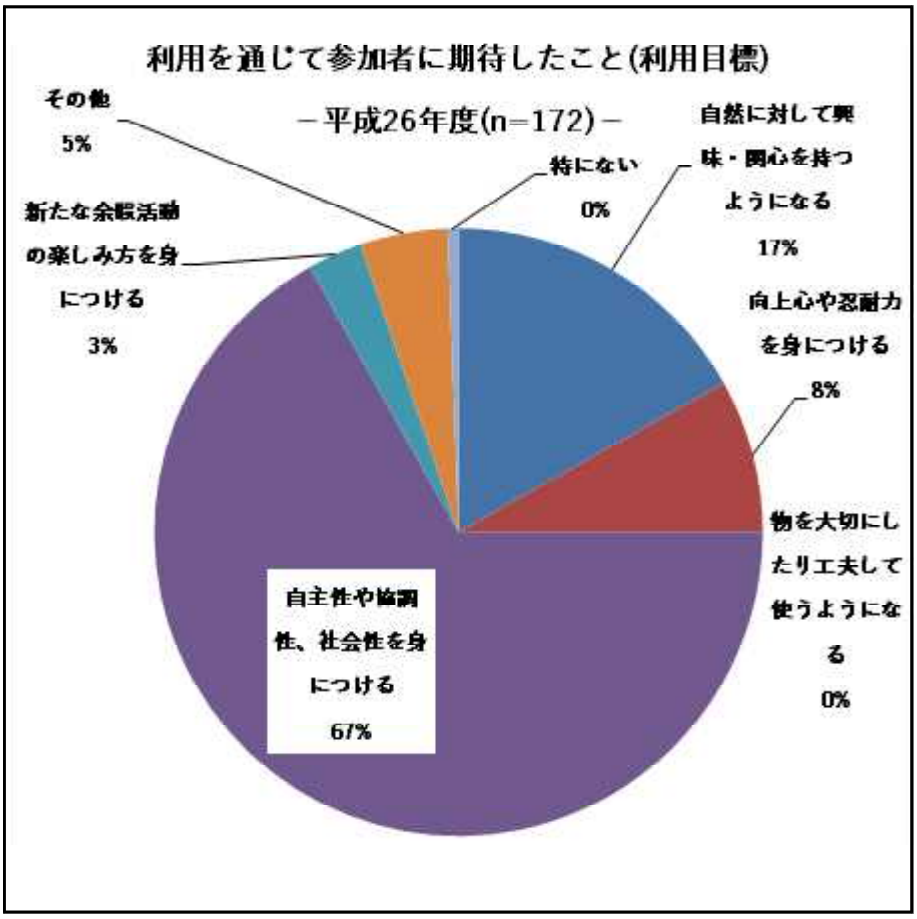
図6　利用宿泊数－平成19～26年度間の変化－

2.　利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）

ここでは、各団体が利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）（単数回答）を取り上げるが、ここでの項目は、青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議報告『青少年の野外教育の充実について』（平成8年7月24日）で挙げられている「野外教育の目標」および「野外教育に期待される成果」を参考にした。上記会議および報告については下記URLを参照（平成27年11月29日現在）。

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/003/toushin/960701.htm

図7で示されるように、最も比率の高い利用目標は「自主性や協調性、社会性を身につける」の67%で、次いで「自然に対して興味・関心を持つようになる」（17%）、「向上心や忍耐力を身につける」（8%）が続いている。



「その他」の内訳

管理者として自らの価値観について考える。コミュニケーションを図る。指導者の資質能力を身につける。心理カウンセリングを身近に感じてもらうこと。スケート体験。通常経験出来ないスポーツをする事によって何にでも興味を持ってもらう。普段できない体験をすること。プラネタリウム。

図7　利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）

この利用目標の平成19～26年度の変化については（図8）、「自主性や協調性、社会性を身につける」は8ヶ年を通じて最も比率の高い項目で60%前後で推移している。次いで比率の高い項目は年々変化が見られるが、平成24年度以降は「自然に対して興味・関心を持つようになる」が20%近くの比率で推移している。

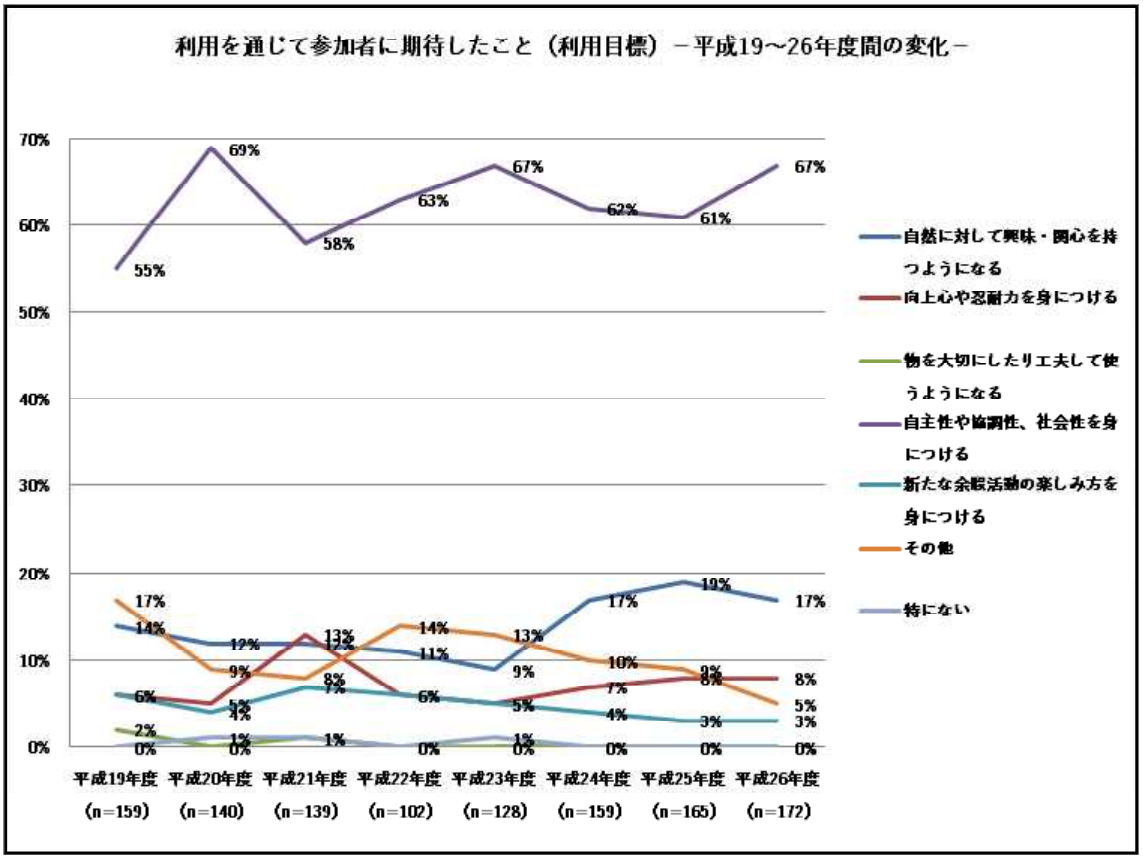


図8　利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）－平成19～26年度間の変化－

3.　利用目標の達成度

利用目標の達成度については、各利用団体が挙げた「利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）」について、今回の利用を通じて期待通り達成できたかどうかを、「期待以上にできるようになった」「だいたい期待通りできるようになった」「ほとんど期待通りできなかった」「まったく期待通りできなかった」のいずれかで各団体自身が判断している（回答者は利用団体担当者であるが、その選定は各団体の任意による）。

その結果、図9で示されるように、「だいたい期待通りできるようになった」の比率が最も高く（78%）、次いで高いのは「期待以上にできるようになった」の19%で、両者が全体の殆どを占めている。

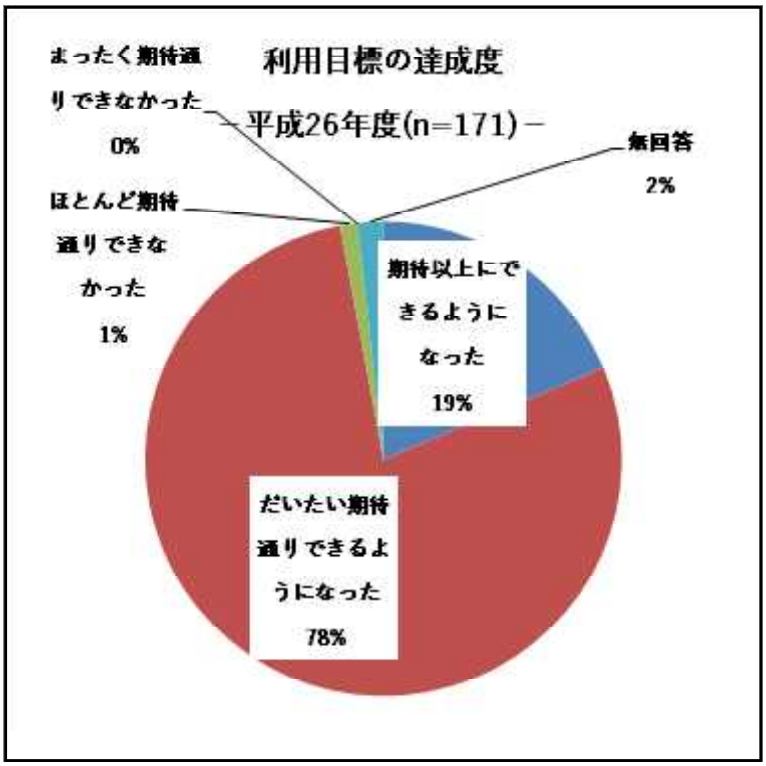


図9　利用目標の達成度

この達成度の平成19～26年度の変化については（図10）、「期待以上にできるようになった」と「だいたい期待通りできるようになった」を合わせた比率は8ヶ年を通じて90%を超えている。一方、「ほとんど期待できなかった」の比率については、毎年度5%未満で推移しており、「まったく期待通りできなかった」と合わせても5%未満である。

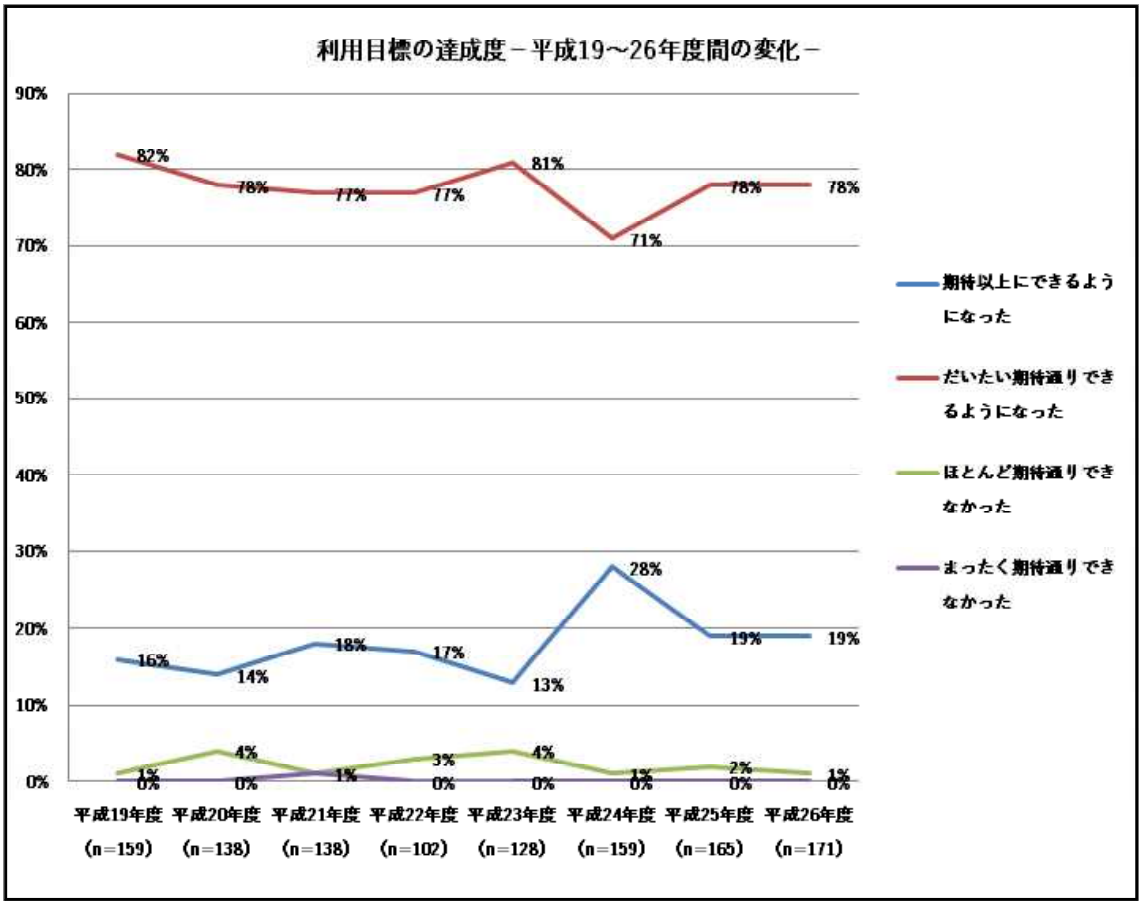
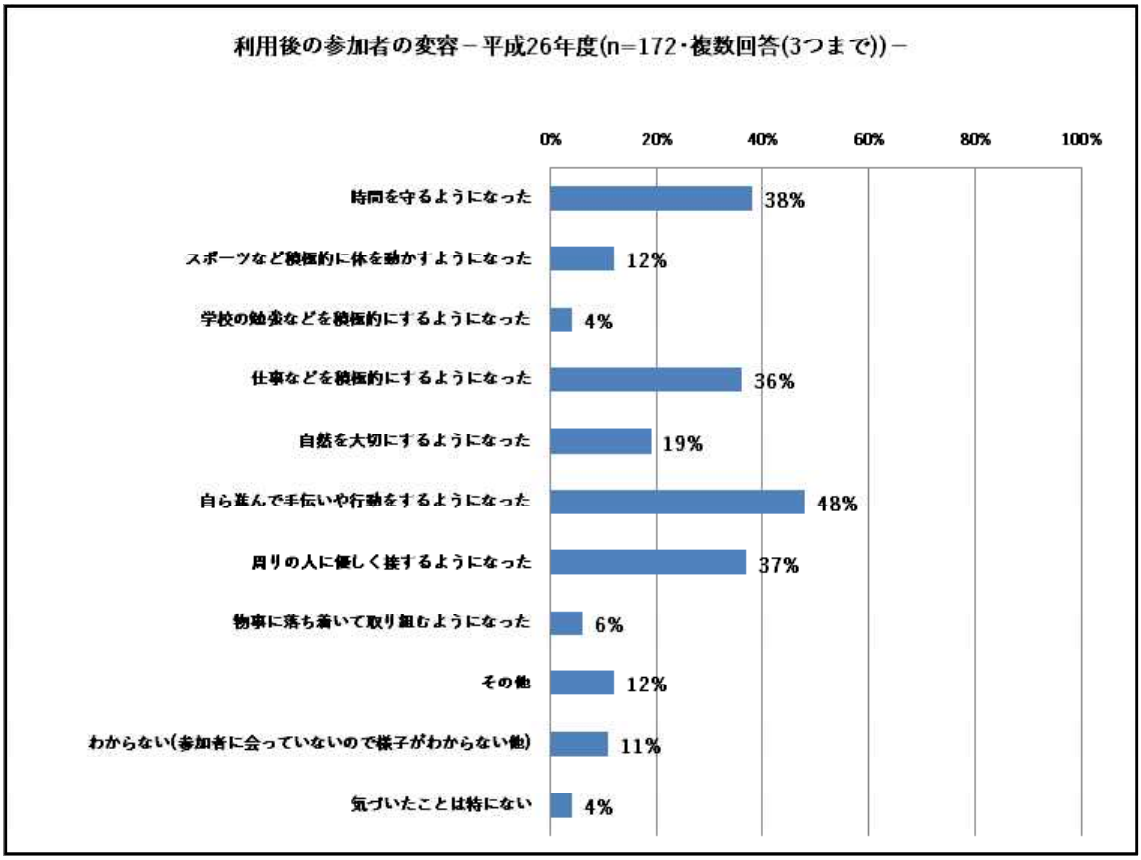


図10　利用目標の達成度－平成19～26年度間の変化－

4.　利用後の参加者の変容

利用後の参加者の変容については、利用後1ヶ月以内の変容について利用団体担当者が分かる範囲で捉えているが（複数回答・3つまで）、その結果は、「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」（48%）が最も高く、次いで、「時間を守るようになった」（38%）、「周りの人に優しく接するようになった」（37%）、「仕事などを積極的にするようになった」（36%）の順位で高くなっている（図11参照）。



「その他」の内訳

大人や小人を含めて会話ができるようになった。協力して活動するようになった。クラスで声をかけ合い仕事をするようになった。交友関係が広がった。困難なことにも粘り強く取り組むようになった。参加者とのコミュニケーションが深まった。自信を持った（一人で泊まれる事）。親しい友人が増えた。指導者についての興味関心が高まった。自分たちで判断して行動できるようになった。自分で物を作る事が好きになった。自分を支えてもらっている人への感謝の気持ちを表していこうという気持ちになった。集団で行動する時のルールを守るようになった。集団行動における各自の責任をはたせるようになった。友だちの大切さ良さに気づくようになった。仲間同士で積極的に助け合うようになった。日頃の園内のやくそく事を確認、更に継続を深めた。星に興味が深まった。まだ様子は変わらない（コミュニケーションはとる様になってきた）。リーダーが自信を深めた。リーダーとして下をまとめられるようになった。

図11　利用後の参加者の変容

この平成19～26年度間の変化について（図12）、「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」が平成24年度以降最も比率の高い項目で、次いで順に高い「時間を守るようになった」と「周りの人に優しく接するようになった」はそれぞれ30%台で推移しているが、平成26年度では「仕事などを積極的にするようになった」が両者に接近しており、平成24年度からは16ポイント上昇している。一方、「スポーツなど積極的に体を動かすようになった」と「その他」はともに下降傾向にあり、平成21～26年度間で、前者は8ポイント、後者は10ポイント低くなっている。

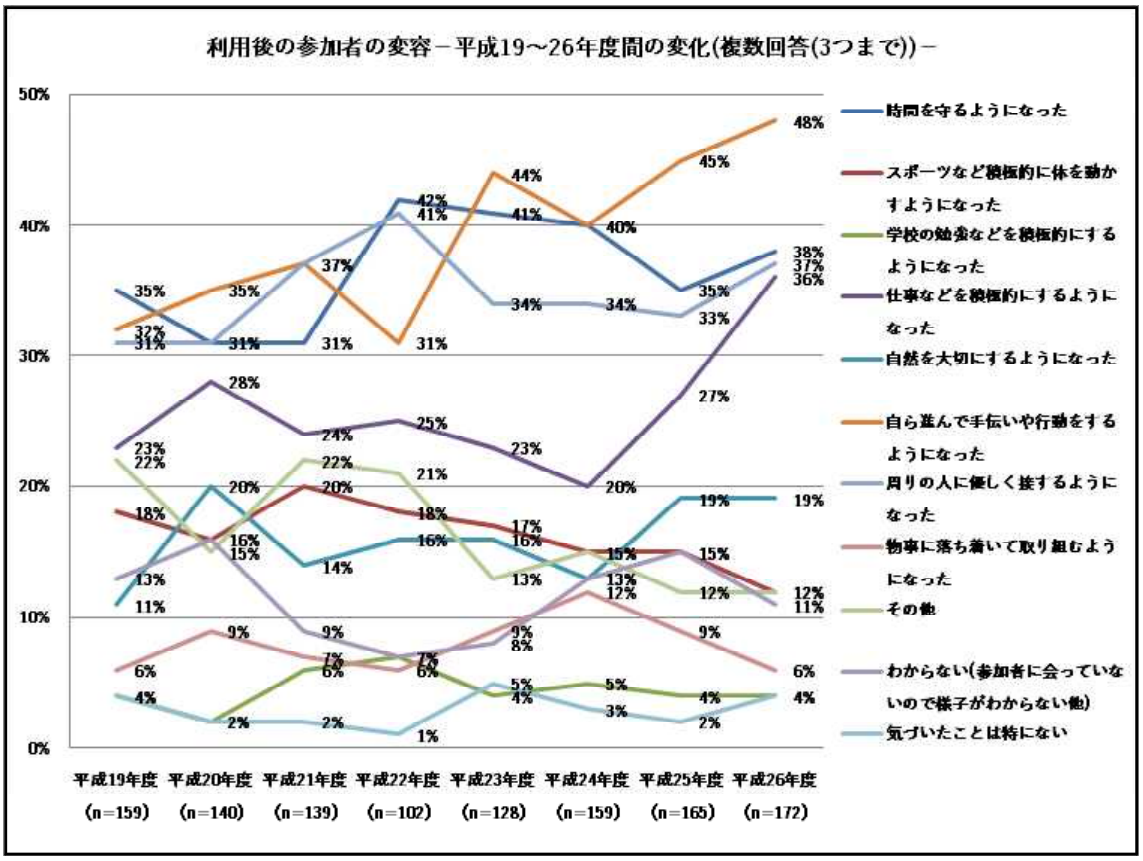
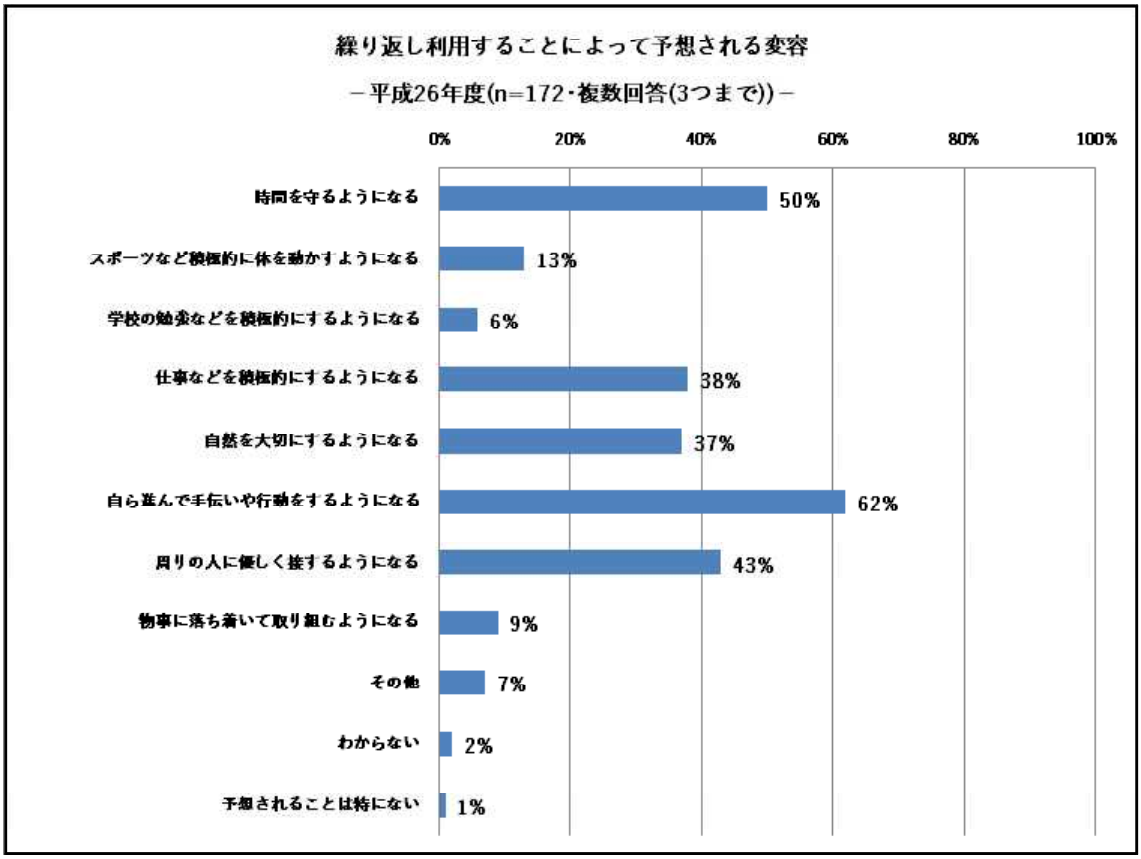


図12　利用後の参加者の変容－平成19～26年度間の変化－

5.　繰り返し利用することによって予想される変容

繰り返し利用することによって予想される変容は、利用後の参加者の変容と同じ項目について、今回各団体がそれぞれ計画した活動を繰り返し実施することによって日常の参加者に現れると予想されるもので捉えている（複数回答・3つまで）。その結果（図13）、「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」が最も高い比率で62%、次いで「時間を守るようになる」（50%）「周りの人に優しく接するようになる」（43%）となっている。



「その他」の内訳

挨拶の実施。異年令(ママ)との交流による段階的な自立。管理者・リーダーとして会社の利益を生み出すチームをまとめる。コミュニケーションが深まる。自分の行動に責任をもてるようになる。自分のことは自分でやる（自ら行動する）。集団行動（周りの人のことを考えて行動）。集団生活における各自の行動。センタースタッフを含め、多くの大人達と触れ合う機会が増やせる。友達と協力するようになる。仲間（同期）のつながりを大切にする。不登校や悩みなどを1人で考え込む事がなくなる。

図13　繰り返し利用することによって予想される変容

繰り返し利用することによって予想される変容は平成20年度調査から加わった項目であるため、図14の通り7ヶ年の変化を示すことになるが、それによると7ヶ年とも「時間を守るようになる」「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」「周りの人に優しく接するようになる」の上位3項目は変わりない。但し、3項目に次いで比率の高い「仕事などを積極的にするようになる」と「自然を大切にするようになる」が平成24年度以降上昇傾向にあり、平成26年度ではそれぞれ40%近くに達している。一方、「スポーツなど積極的に体を動かすようになる」は平成21年度以降低下傾向にあり、平成26年度までに9ポイント低くなっている。

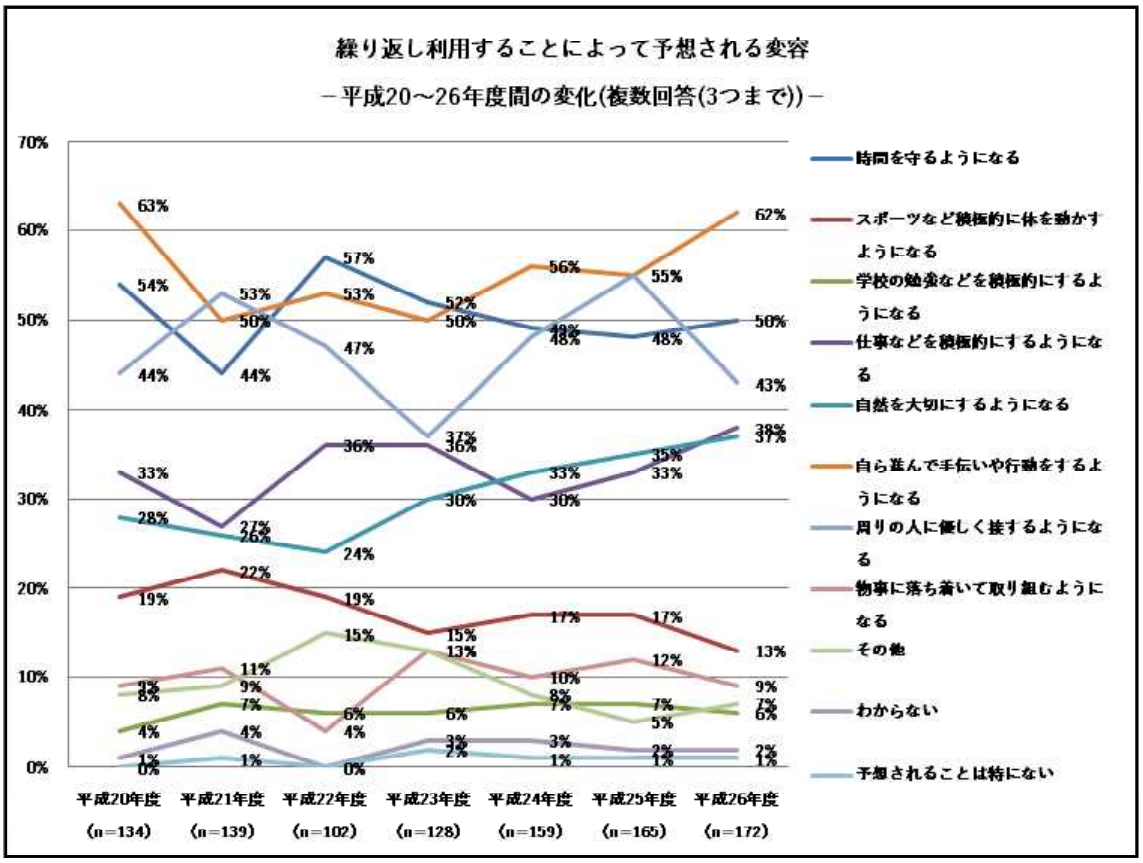


図14　繰り返し利用することによって予想される変容－平成20～26年度間の変化－

Ⅳ　調査結果のまとめと今後の課題

今回の調査結果は、次の4点にまとめることができる。

第1に、利用団体のプロフィール（利用団体の種類・利用団体の主たる年齢層）については、「小学校」と「7～12歳」がそれぞれ最も比率の高いカテゴリである。経年変化で見ると、「小学校」は、30%台後半で推移していたところ、平成26年度で40%を越え、「7～12歳」は、平成23年度以降は60%台で推移している。利用宿泊数は、「1泊」と「2泊」が全体の殆どを占めながら推移しており、両者の全体における占有率は、平成21年度以降は8割を超え、平成25年度以降は9割台で推移している。

第2に、利用目標の種類について、「自主性や協調性、社会性を身につける」は8ヶ年を通じて最も比率の高い項目で60%前後で推移している。次いで比率の高い項目は年々変化が見られるが、平成24年度以降は「自然に対して興味・関心を持つようになる」が20%近くの比率で推移している。利用目標の達成度は、「期待以上にできるようになった」と「だいたい期待通りできるようになった」を合わせた比率が8ヶ年を通じて90%を超えている。

第3に、利用後の参加者の変容について、「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」が平成24年度以降最も比率の高い項目で、次いで順に高い「時間を守るようになった」と「周りの人に優しく接するようになった」がそれぞれ30%台で推移しているが、平成26年度では「仕事などを積極的にするようになった」が両者に接近している。一方、「スポーツなど積極的に体を動かすようになった」と「その他」はともに下降傾向にある。

第4は、繰り返し利用することによって予想される変容についてで、調査項目に入った平成20年度から7ヶ年通じて「時間を守るようになる」「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」「周りの人に優しく接するようになる」が上位3項目で変わりない。但し、3項目に次いで比率の高い「仕事などを積極的にするようになる」と「自然を大切にするようになる」が平成24年度以降上昇傾向にある。一方、「スポーツなど積極的に体を動かすようになる」は平成21年度以降低下傾向にある。

最後に今後の課題について、今年度新たに見られた傾向の検証の観点から述べておくと、次の2点が挙げられる。

その第1は、平成25年度調査結果報告でも提示したが、利用目標の達成度と利用後の参加者の変容（および繰り返し利用することによって予想される変容）の関係分析が挙げられる。さらに両者（およびその関係）を規定する要因として、利用目標の種類、利用団体のプロフィール、センターの環境条件等さまざまなものが考えられるが、そのうち何であるかまでは未解明なので、それらの要因分析も進めることが期待される。

第2は、同じく第1で挙げた両者の関係にかかわることであるが、特に、利用目標の達成度が期待より低い場合の利用後の参加者の変容の特徴分析である。期待通り目的達成できなかった場合にもかかわらず、利用後の参加者の変容（あるいは繰り返し利用することによって予想される変容）が現れるとすれば、それはどのような特徴を持っているのかは今後解明すべき課題であろうから、今後サンプルの蓄積を待って追分析を行わなければならないと思われる。